資料紹介〉 翻刻 『振袖天神記』(下)

翻

刻

会

一、底本には京都府立総合資料館の七行九十一丁本を用いた。

底本を忠実に翻刻することを原則としたが、次のような校訂方針に拠った。

本文は文字譜を手掛かりにして、適宜改行を施した。ただし、道行・景事の類、 会話の途中等では改行しなかった。

各丁の表・裏の終わりは、丁数の数字とオ・ウの略号を ()で示した。

3 「に」「は」「み」とした。 仮名は現行の字体に統一した。ただし、感動詞、送り仮名、捨て仮名の類以外の、 本文中の「こ」「ハ」「ミ」は

5 漢字は、一部の異体字を除いては、原則として通行の字体に統一した。

漢字・仮名ともに、誤字、脱字、当て字、仮名遣い、清濁は底本の通りとした。

特殊な略体、草体、合字等は現行の表記に改めた。

畳字は、平仮名は「、」、片仮名は「、」、漢字は「々」に統一した。ただし、「〈〜」はそのまま残した。

本文の翻刻は、次に掲げる翻刻の会(学部学生の研究会)の会員によってなされた。 文字譜の類はすべて採用し、本文の右傍の適切と思われる位置に翻字した。

芦野陽子、浦野洋紀、小林芙美、石橋佐紀子、竹田奈央、中村梨恵子、日當真心、水田千尋。 文字譜、改行及び本文の最終確認は山田和人が担当した。

(山田和人)

恋はせきやるな浮世は車。命ながけりや廻りあふ。夫レを頼みのとけしなや。アルルドゥ

さはい立ター。所に若い者もない様に其上ちつとほこ前も有ルかして。去ワとはがいく~こつき張(4オオ) も犬も肥るであろ。イヤ米の事で思ひ出す。あの軒ン米の牛頭兵衛め。在所へうせて間もないに。何に寄ず出しやばつての。 は十分>の物成ワきつい上作。ヲ、互作のいやる通ワ。近>年>覚ぬ豊年>是では世界の人間>が。安い米喰て気入ずに。乞食は十分>の物成ワきつい上作。ヲ、互作のいやる通ワ。近>年>

ぞよ。さればいやい。夫レに付ィて気ぶさいな事聞た。道々われ共談合せう。サアおへ〳〵とめい〳〵に。させいほうせい 此村へよせても、畠仕事は働らかずのら付てけつかるが。此辛い世界にあゝして暮せば味い物。何᠈でも合点の行ぬ物じや どこぞでたゝんでこまさゞ成ハまい。ヲヽてや。おいらも胸が悪ハい。あいつはマアどこの牛の骨で今迄何しておつたやつ。

引ヶ車。牛は牛連レ帰りける。

早牛も淀遅牛も。淀ならなくに諺(の。爰に引ヵるゝ牛車取〃べき綱は 徒 に。牛飼人の乗りながら肬を枕は唐人の。顔 回線スポー まいますう ウ)仙は。霜消てさへ美しき素顔でもよい女房の三十にはまだ二つ三つ。愛は取分ヶ兄弟の。子供を連っていそく~と。

堤伝ひを歩くる。

持ッて来た。返しや~~と振袖を引きしやなぐるやら擲やら。逃るを追って泣わめく。母がとらへてコレ~~ぼんち。又無いて来た。

** 殊に血の緒とあいたてなふ持ヶ余したる弟は。五つ計ヮのわんばく者。コレ姉様ン。其人ン形はわしがのじや。なぜお前が嫐や

やりましよ。それ共又いふ事聞ぬと。と、様シに告たらいつものひね〳〵。ヲ、こはやのとおどしても。イヤ〳〵外のはい 理いふてじやゝ踏ムのか。そしてマア勿体ない。姉様シを擲ィたら此手ゟかくさるぞ。人シ形がほしいならよいのを嚊が買てタッジ

やじやあれがほしい。おこせく〜とぐはんぜなさ。コレ其様に仕やるとアイ(45オ)そこねるわいの。ほしかかそふとおと

右と左に月と花。一つ詠めの親心。子にてはうさを忘れ草。道くさながら。行先*の。 源次郎のわやくで思はぬ隙人。内にはば、様待てゞ有ふ。 独 あるかすと果るこつちやない。ドレ手々引ィてやりませうと。 なしく。オ、姉は年かさ賢い~~。そんならちとの間借てやりや。其かはりべ、ぬやるならよい切レかゝがやりませう。

浜の上野に引き捨し。車の上なはこちの人。オ、コレ道チー中にめつそうな。そして此さむいのに風ひこと思ふて。ササ 主シは寝てゝ有ふと儘。 われは引ィて戻りはせいで同し様に。ヲ、こはあの鼾わいの。コレ起さんせ〳〵と。 ゆすれど

い最中をつめたいほでゞと起直り。目を摺火燧かつち~~。コリヤ女房共。子供を出しにそなたののらか。内を明ヶてどこ さらに白川夜舟。弟は車にかけ上り。と、様、戻れと幼気な。楓の手(45ウ)先撫る顔。ムンとふんぞる伸欠。ヱ、味いらに白川夜舟。,

いたア、 嗜め~~。ヲ、名立ーかましい事計ワ。わしがいつ片時。からい世帯を持ながら優長 らしい遊山ン所か。いしこ

らしい女房呵るこな様ンが。いつぞやから昼は間がな透がな高枕。火を見るとかけ出し待テ共いかな戻らばこそ。

に一下言もどこへといへば顔付悪でう。女房に物を云さぬ仕方。かういや恪気と思はんしよが。大事の~~母御様。

はふ。 異見交りの御肝積。ようマア物を合点せい。今迄こそ主人といふ仕送り宛に。浮世狂ひも成ッた物。 男頼の女房の身必悪ハい外心。持ッでばし下さるなと目には涙の早浮み。ほろりと泣ッす上手者。ア、痩世帯苦にもせペ゚ (46オ)子供のひかへ糸。といて仕廻ふて新しいよい楽しみが出来たかへ。男は松女は藤。松有レばこそ藤も お年寄りは何ゝ時知レぬ夜歩はやめてほしい。コレ今迄とは違ひます。立居出入にしなつこう。とゝ様よ

おまめに有迚も。

又もぶんじた弟め。一人ワならず(46ウ)二人の首かせ。かゝり人は有ワ大事の母。何ンぽ生れた所でも両親もない女房の事 ず どふやらかうやら 育 む中チ゚。 思はず不慮の我浪人。そちが古郷の此曽根村。夫レを便ワに足を留メ゚。 とくれこくれくらす中 か。そなた迚も御所方に勤の内を互の楽しみ。かうじて腹に申分シ。人を頼んで産落したあのおそね。御奉公の余けいにてか。そなた迚も御所方に勤の内を互の楽しみ。サザー 此身に成ッてそこ所

世話は互友 挊。又畜類ならしらず。名は牛頭兵衛でも我等人間ゝ。義理も情もしつてゐる。面白いといふも世に有時。見 る事聞事無常心に成ル時節。 譬天女が天くだり。情所見せかけても七里けんばいいかな~~気は写らぬ。気遣ひのきの字。***

で生れた故に。不便ゝさは猶増物を。夫レさへもせはしない時々は。 和らぎ。ヲ、夫レで心が落付ィた。嬉しい事は取分ケでけふ(47オ)は弟が誕生日。かはいや姉と違ふて。物事不自由な其中が言 やりと。もろき女松のむず折レに。必そふかと目でしむる。ヱ、愚痴者めと呵るのも。根が睦まじき女夫中。跡は笑ひに打やりと。 には長点ゝかけたりこちの弁天。船ナまんぢうの取柁も今宵の風まん取かけるぞ。船玉清め待チ給へと。ざれてかゝればほい 呵る計りの捨育。子供は夫レが薬やら虫腹一トつ痛ませ

けれど。幸ィの明キ車。 枯柴つんで跡からいの。 母人も待てゞあろそこへ帰ると申ておきや。定ゞてお神酒が。 ヲ、有ル

ず。二人リも二人リと達ツ者もの。皆神仏の御守りと氏神様へ参つて来ました。ヤレ〳〵夫レはめでたい事。ヱ、連レ立てい

0

〈資料紹介〉

放し人ゝ形を。しやんと打乗セはい〳〵〳〵〳〵。ソリヤ殿様シのお通ワじや。先キのけ〳〵ヤツシツシ。姉は小哥をしほらしく。 上々諸白馳走ぶり。何はせね共おなまにてちよつと計りの内祝ひ。早う戻つて下されと。咄しの内に弟は。牛とき

牛もほゝるや。よねんなく。母も引ヵれて。立帰る。ゥ

空を詠て牛頭兵衛は。ア、どふやら又曇て来た。ふらぬ先きにと堤をさがり折取枯枝柴々も。願行におこたらず切磋琢増りを変め、ココ

こなたは、漸、柴引ッからげどりや爰でこそ楽しみ草。腰さげの庭打ふるひ。なむ三、煙の種が絶た。ヱ、ないと思へば一ばౣ

かしの武任。汝是善の勘気を受ヶ郷民と成りし由。あつたら敷す良臣を。失はれし残念ゝと兼ては思ひ有けるに。堅固の体がしの武任。汝是常 こは僧正 いたまらぬ。ヤ幸ィの修行者。定メスで、嗜、有であろ。寺から里な事ながら。たばこの無心シち立寄ッで笠の内見るより。ハアいたまらぬ。ヤ幸ィの修行者。定メスダをスダルダルダルダルダルダルダル (48オ)にてましますか。ハ、、思ひがけなき御対面と両手を。土につく~~と。遍照もや、打見やり。 ヤアなつ

は満シ足せり。去ッながら。浪々の身の苦労にやハテ面かはりせし者かな。 譬 世にふるたつきにてなす業こそはいやしく共

の露命をつなぐ口惜さ。所詮>腹切相果んと幾度ヒか取ル刀にさへ。(48ウ)面目もなき次第なれ共恩愛の忰レが事。老たるい。 方様。見奉ればいとゞ猶。思ひ出す主君ゝの恩義。忘れぬ弓矢も山田守ルかゞしのごとき土民に迄。膝を折腰かゞめ。今日

りながら某が縁者と計り。女房に迄心赦さず。力のつゞかん程迄は。随分シいたはり参らする。せめては是を申立トに何とぞ 廻り逢。何かの様子残りなく逐一に承り。直々様我家に御供し御かくまひ申せ共。世上を忍ふ御身なれば。とかく人目を憚 母を誰レか又。 育 くれん者迚も。歎ササくらせし此年シ月。仏神に祈誓をかけ朝夕願ひし 験 にや。ふしぎにも軒端の御方にのを誰レ

若シ運尽て敵に囚はれ。骨を砕かれ膽を煮共。心は鉄石夫レこそ本シ望。忠義の為に命を(49オ)落さば。いか計リ母も悦ば

ちさへ有俗にかはらぬ思ひして。いづくにさまよひ有やらんと。心苦しく有つるにヲ、過分シぞや。悦ばし。 物は親子の愛情。雲井の鶴は月かげのさやけき空と思へ共。子故の闇にかきくれて声をかはして鳴クと聞。 平身手を合せ涙と倶に願ひける。遍照も感涙に。衣の袖をしほられしが。実武士の上にては義心は重く一命は。鵞毛より軽 しとや。誠に節なる。志 何かはあしく計はじ。殊更に我娘汝が方に忍ぶよな。心尽し思ひやる。扨も〳〵世の中に節なる 世を捨人の我

安*に有ても。危。を忘れぬこそ肝要。事に寄ッたら女房も離縁致さば跡は母也 稚ッポ るか。ハヽヽヽヽ 其方が志シ精誠成ルに依て。天帝より暫シの内預ヶ給へる秘仏ツなれば。凡夫の眼にかゝらぬ御頼も。 何をかな報恩せん。ヤ是(49ウ)幸~と背負たる。厨子取おろし。いかに武任。此内に安置せしは十一面ン観音の御尊影。 増する ほうまん ほうまん しょう しょうしょ しょうしょ しゅんち 冥加に余る御賜。某授り守護するからは。泰山は前に崩れ。 き悴レ。 麋鹿左右に奥間共いつかな</ 、 肉身の者共計リ必御安堵下さるべ 慎信心せよ。ナ心得た

しと只一心シに凝たる魂。 ホ、頼しく、。 既に海内穏 ならず。 朝敵名虎が権威に恐れ。 きのふの味方もけふの敵。

〈資料紹介〉翻刻『振袖天神記

護摩の利刃

がてめで度吉左右せん。先ッ夫レ迄はざらば~~。ハアおさらばと見送タる義者と見返る行者。忠臣の道一ト筋に足を早めて。 を打立す。追立す悉、

跡には御厨子車に乗よそめを覆ふ苫幸。引 繕 ふてゐる所へ。蚤取『眼に以前》の牛飼。走『くる(5オ)より牛頭兵衛が腕巻。 首。双方よりむづと取。われは~~醜しい。働するな。此街道は昔から用心>のよい所。此比は物騒で。夕部も剥だ取れば、

急がるゝ。

と引ッ立る。ハテじやらく〜と手合すな。人をおどして楽しむのかい。覚がなけりや何共思はぬ。 われがのじや見しつてゐるか。譬又人違へでも大事ない。ぐっと詮シ義しぬくのが所の為。 たと昼さへ人の通りが薄い。慥に見たはけさの事。此松原のはづれに。殺されてゐた飛脚の死骸。傍に有たたばこ入は。 代官へ連って行。 ヲ、覚が有ハかない ・人歩め

込ょじやくめつ入相の。鐘も幽にほのぐらき。木影に隠れ女房お松。様子聞ヶ共何気なう。今来た顔で走り寄。コレこち、 サール・ディー かず かず かまか こうしょう 蹴すへる金脚。脾腹蹴られて息ひい(~。うごめく二人~(51オ)が「吭」を両方一度に土足のとゞめ。骸「を直々に池水へ打け」なまね。 此マア車がきぶさいなと。立寄『二人が首筋。掴。ばつた~~投られひるまぬ我武者。つかみ付ヵんと立か、る寄付もせず

人もふ日も暮ぃたに何してぞ。きつう遅さに迎ひにきた。サア連ぃ立ッていにませう。イヤまだ庄屋に用も有。 いたらば

の御身の上。なぜ隠して下さんした。討袋様もお袋様。お前はしつてゞあらふのに。ついかう~~と打明ヶていはしやんせ さしやんすのふ。とはいふ物の聞へませぬ。最早十年セの上越シで馴染 重 た女房の心。しらずにかいのどふよくな。軒端様 て夫トは行水の元トへ返らずよどみなき。我レが心を人しらで汲取ゥぬこそ是非なやと。涙ぐど〳〵独言。いとしや気苦労で夫トは行水の元トへ返らずよどみなき。 世話。隙取たらこつちの身。どふ成と勝ッ手にする。ヲ、勝ッ手にせいと云ちらし腹立紛れ引ゥ車。工合損ねし女夫合。離はなまる。 に添て居て面白ふない。一向隙取҆҆҆҆隙おこしや。ヲ、やらいでは。去っこくるどつちへ成と行おらふ。行っと行まいと入ぬお きりかたげて来たのであろ。サアそふでなくばありや誰レじや。ヲ、妾じや。何じやおてかじや。ホ、、、、恥しうもな てこらへたが。もう虫が聞ゥぬぞよ。コレそつちが聞てもこつちが聞ぬ。いや近付ャの縁者のと。引ゥこんだ掛り人も。てつ で。心の安(51オ)まる事がない。畢竟が今迄も二人リの子供が有レばこそ。さでなきや何の不自由らしい。此広い世界じて。心の安(51オ)まる事がない。単意が今迄も二人リの子供が有レばこそ。さでなきや何の不自由らしい。此広い世界じ いつも日和ワと 頤 がはしやぐな。ヲヽじやくは時雨の降りかゝる身の行末が案じられ。 碇 失 ふ放れ松風に任せてゐる様 定メスで隙がいろ。そなたは先キへ。いやいぬまい。もふそう~~は釣れまい。こなたはほんに夜ルの殿。だましよい者じや迚。 うてよういはれた。ヲ、結構な御身シ代じや程にゑようが道理。ほんにまゝよりおすき(52オ)じやの。そんなつまらぬ男 男日照りは行まいし誰が付きはつてゐる物で。悪が性のせいとうに。根も愛そも尽果た。ヲヽおれも儕レが常からの。 生れ賤しいわたし故さがない心も有ふ(52ウ)かと。疑はる、が恥かしい。こんな事なら死しやつたと、

あろけれど。乳離さへもせぬ弟。ちよつと昼寝の現にもわしが肌身が添いでは。寝にくがる物夜ハは猶。誰ハゥすかしたらし続いた。 鬱紅 公に行まする。跡で子供が尋るなら。よう云聞せてやつてたべ。嘸 姑 御のお世話であろ姉はまだしも女子だけ。聞分ケも 浅ましい。非道の業。夫レも何故金がなほしや進ぜたいと思へどはかない女の思案。わしや室の津へ身をしづめ。 「悕」い。なぜ百姓で有ッたぞい。侍ヾの娘なら。是程には思はれまい。夫レはとも有レ悲しいは。いかに忠義の為じやック゚゚゚゚゚゚゚゚゚゚

るゝ気 いふごとく。胸の有たけくどき立いふても。尽ぬ思ひなり。浜辺の方に泣声は。我を慕ふて兄弟が。尋て来たかかはいやと。 まいとわざと去ラるゝにくて口。ほんまにあいそ尽さずと。別れてゐても夫婦じやと。思ふてやいの頼むぞへと傍なる人に (53オ) にかゝる。 お前も随分シ身を大事に。持病の胸痛おこさんすな。あから様にもいふならば。よも得心は有ルお前も随分シ身を大事に。持病の胸痛おこさんすな。あから様にもいふならば。よも得心は有ル

た迚。何ゝの聞分ヶ有゚ル物で。あやくいふ迚かんならず。きつうおどして下さんな。ひよつと虫でも出ようかと。案ゝじら

不便やな兄弟は。ふゞきに笠をとられしど。おさ(53ウ)ゆれば又浜風の裾吹*上て身に通る。寒さ絶兼ちよこ~~走ッ先** かさすまいかと行ては戻り立つ居つ。心そゞろに定ゞ兼いづれをよしや芦のかけ。音を泣さして忍びゐる。 行んとせしがいや〳〵〳〵。どふで別れる身じや物を。なま中逢たら離すまい。さはいゑちよつと顔見せて。得心ンさそふ。

たかたゝしてやらふかや。いやく~つめたうてもだんない。そんだいかゝ様シ呼シで下んせ。おりやねふたいわいの。

に成ては跡見返り。おくれては呼ヒ招き合互にいたはり雪道を。テンタ々たどるぞいぢらしき。コレ源次郎さむいのふ。つめ

ヱ、胴欲な。かゝ様シどこへいかしやつた。わしも逢たい。かゝ様のふ。迷子の〳〵かゝ様やいと。西に寒ジ

走りつ東にさけび声も枯野に身を打臥。泣を友かと磯千鳥沖の。かもめも音をそへて。いとゞ 哀 を聞母のこたゆるつらさ

る。 は子の百ばい。いつそ此世になき身ならかうは有まいいた~~しや。身捨て是がどふ行ゥれふ行ねば心の義理立ゥず。つれ 風の谺に聞まがへ。あらぬ方をばかけ廻り。どこにいさしやるか、様のふと。尋こがれてそこよ爰。慕ふ姉弟したは。「泛゛・・ (54オ)するもかはいさ故。やつぱり子の為夫+の為。なかじ~~と喰しばる袂を口にかいもなくわつとの声を吹送々

は松の並木にて。ねぐらの鳥の立さはぐ。羽音トに恐れちりぐ~に。別れ迷ふて。三重へ行末は、

るゝ。母は 魂 身に添ず傍に有とは白妙の。猶も 頻 に降隠し姿見留ゞず只うろ〳〵。のふかゝ様が。コレ爰にと。

すがる

袋文字。牛のつの文字直な文字。ゆがみ文字共思はれて。父を慕ひの言の葉に枝もたはゝの夜ュの雪。白井太郎か情にてサヤンヘ 奥と。口とに隔の住居。夜^ル昼かはらぬ問見舞。

白木の机に寄っか、り。長び給ふ御風情。ノウ申。八才の御時より叡山ンにて御手習。四五年ンの内に御学問。 障。子しづかに音ーなひて。まだお休፳遊はさぬか御機嫌いかゞと押シ明クる。あやしの一ト間に御注連縄。ルサラービ 早十二才の菅三君。

籠て擒とし。 眠の間を惜むは。手習ひ読書の為のみな(55オ)らず。深き心>願>有ての事。我父是善卿名虎に随ひ給はぬ憎しみ。 し御発明も 理 。いく夜さも~~ついに御寝なる体も見へず。左様に精根をお砕き有てはお命もたまるまい。もふ今肖もばのないには 此比は御命を失ひ参らせんとの計ひ。其元トは姉桂姫と。此三丸をかばひ給ひし故なれば。我故父の命を遺れる

断き事。 思へば悲しさやる方なく。父のかはりに我命を取ってたべと。天に祈誓の三日三夜。願ゝ成就の其験。

(資料紹介) 翻刻 [振袖天神記

翻刻『振袖天神記

0 ・日の出迄に一千ゝ遍読終らば。長き別れと思されよと。思ひ切たる御詞。初メて聞たる身の悲しさ。御尤とはいひながら。 此一枝は庭の松か枝。 風も折ぬに片枝の 忽 枯しは。我命の終るしらせとなんぼう嬉しく。日頃信ずる 観音 経。明日まら、また。 たんきょう りょう しん くばんきょう りょう しん くばんきょう り

て。

お^色

うぞ心が付たれど。煮焚せぬ生物。大事のお身には上られぬ。殊更どんな毒虫が付って有ッまい物でもない。とかくお命長 りや二三日の降つゞけで。空は真黒庭は真ッ白。雪かく次手に落た柘榴。 ホ、、、、こりやまた夜も明ヶぬに早いお寝ざめ。お寒ふござりましよ。 ふなければ。ソレ〜〜益に立ぬわしらでも長生*には飽ませぬ。まして菅原の公達様。忰レ(56オ)太郎が子迄有ル女房去ッ゚゚ಁ したが年が寄ルととふから目が明って。 後き程お菓子に上まして下さりませ。 裏 へ出て見

にも花咲ヶは観世音の御誓。此松再び青葉して。お命救ひたび給へと心にこめて一枝を。裏の小庭へ植に行っても花咲ヶは観世音の御誓。此松再び青葉して。かまて、からないといいでは、またいでは、またいでは、またい 明はよけれ共お片意路なが玉に疵。松の片枝枯た迚一-筋な思し切。 泣てばつかり。寝ルにねられず自 も夜ハもすがらの貰ひ泣。武任殿の心根を思ひ廻せば廻す程。 お前は父様の命乞。 わらは 猶大切ッなお前の身。 、お前の命乞。 枯レたる木 御発き

あなたを敵にしられまい。お命大事と思ふ故じやござりませぬか。ホンニいとしや二人」の子供衆。

母御をしたふて

で 面まっ は

音も聞しるぬからぬ母。太郎帰りやつたか。嘸寒からふ。マア~~あたりやとゐろりの火。ほた~~もやす。

(56オ)埋むしら商売昼夜まだらの鍋墨顔。夜 働 きの帰りとは近^所へ隠す。気 噯 ひ。外はのぶとく我内へ。おづ < ^戸

口しめ明ヶの。

そりやアノ殺してかアイ。イエーへそこ迄は行ね共ばひ取た路金。まあ是で百日余りの賄ひは慥。御安心、なされませ。 ぽでも寝やらず。乳が出ぬ迚無理ばつかりいやります。ちつと呵つて下されとなく~~父に取付ケば。ヱヽめろ~~と侍のぽでも寝やらず。乳が出ぬ迚無理ばつかりいやります。ちつと呵つて下されとなく~~父に取付ゲル 年だけおとなしく。軒シとゝ様。此かゝ様は何として戻らんせぬ。夕部も源次をばゞ様とわしと二人ワして寝さしても。 の事迄も忘れ兼たる恩愛の声に目さます呼子鳥。源次郎はまだぐはんぜなく。か、様に逢たいか、様呼シでと泣計ワ。姉は に非道の金を戴いて。悦ぶそなたの底心シは。嘸口惜からふと母親の。くどきに心武任も思ひ廻せば身の不運。去シた女房 悪人退治する迄は。いか様の艱難も厭はぬ~~。サア其名虎をおぬしが力で討ッ事はならぬぞや。ソリヤ又なぜな。サイノ だ事立ド通さねば置ーぬ武任。コレ此小柄は京都において。朝敵名虎に打かけた眉間の血汐。かはかぬ中トにきやつが首 が思はるゝ。ア、気のよはい母者人。主人ゝを御世に出したらば。百金ゝは千金ゝで返す。暫く人に借ュといふ物。 ヲ、そりやまあ嬉しい (~。が迚もの事なら正道な。天の 先ッ悦こんで下さりませ。今ッ夜はしつかりとよい。設。何でも手ごたへ十四五両。首にかけてゐるやつを一個にヤア人 ウ)いつもの性急では。 んと思ひしに。早うか~~と五年ゝの月日。血は切先キに錆付ケ共。名虎が威勢は夜に増日に増。見る度ヒ聞度ヒの無念ゝさ。 何程念シ力は堅まつても雉子と鷹。一天の君の御運ひらくる時節のこぬ中サは。中々くつ討タれぬ名虎。そなたのはなった。 敵の為に犬死をめされふかと気遣ひな。お主へ忠義を思ひ過。 (57 オ 恵の賜なら恭ふも思はふに道ならぬ世渡り。

ののないたまもの
・地色へい して勘シ当受ケ。山賊夜盗の世業 思ひ込さ 人の報

(58オ) おそね。母親計¬が親で爺親は親でないか。若>と、とか、と喧咙して

子の様にもない未練なやつら。

コリヤやい

〈資料紹介〉翻刻『振袖天神記

な。 縁切ッた時は。 わりやおれが子に成り気か。但シか、が子に成って出て行心か。夫レいへどふじや。返シ事せぬはか、が子じや

乳が呑たいと。あどない孫を抱しめて。ヲ、道理じやそれがじよいの。アレ聞きやつたか。切ッても放しても放されぬ。こサジー∞。 声。ム、出かした。コリヤ坊主よわりやと、が傍に居たいか。かゝが傍に居たいか。アイおりやとゝ様の傍に居てかゝ様の

り懐に。入ても老の肌寒き。乳房尋る哀さよ。 street んないたいけな子の有ル中を。 別れにやならぬもお主の為。何にもしらぬ此孫迄。かはいや忠義に痩たなと撫さ(85ウ)

す

迚。大きな目なお侍が大庄屋へ大勢。ハテやかましい。めつたむしやうに大きな事じやの。詮義じやのとこつちに覚もない 詮義の筋貴様しらぬか。サア大きな事じやが。詮義の筋は 小い子の事じやげな。ナニ小い子の詮義。ム、<<>ときつ

うつとりと肝に焼鉄指える。口にはいはず親と子が案じに。ほつといぶきどの祓ひ清めを。身のすぎはひ。天津常のとりと肝に焼鉄指えらった。 (59オ)

祝詞太のつとかく聞し召シては罪といふ罪科といふ科はあらじと。しなどの風の天の八重雲を吹サはらふ事のごとく。やいのとが

鎌のとがまをもつて打はらふ事のごとく残れる罪はあらじと。祓ひ給ひ清め給ふと申事の由を。八百万ッの神達ヶ諸共にさ輩

にあのお方は事の吉凶善シ悪を悟て。祓清むる奇妙な祢宜殿。 を鹿の八つ耳を。振り立て聞しめせと申ス。ア、聞たうない通らしやれ。コレく~勿体ない事云やんな仮にも神の名代。殊 かういふ所へござつたも則神の 導 。おはいりなされお

して有ッたへやいの。姉迄が同し様にいちく〜せすと源次郎を。遊ばしてやらぬのか。いつ迄も子供の様に。ヹヽしとのな を。引て納戸口。只さへ寒き雪の日にかわいや夜乳がない故に。此いちけた顔はいの。ひもじからふに此かちん。コレふう 成ッたな。いか様寒いに帰らふより。暮レ方迄はお台所で昼寝の岩戸。御供のお世話に成ワませうかい。そんなら拙ッ者はい と御祈禱申さふ。高間が原にかみ様お 暇 おさばらと立帰る門トの戸を。外トよりはたと立ト切ル牛頭兵衛。こりや御亭主ど 胸の合紋ひつしりと。逃れぬ松の片枝に力ッ落葉の。恨なる。ナント違ひは致すまい。此(60オ)上ながら帰つても随分ン る。こりや定まつた命数。祈禱の力に叶はずと六神ゝ通の「占」に親子互に顔見合せそんならどふでも二人の中ハアはつと。 年シ。其二人ッの中に是非一人ッは。けふ中に命を 失 ふと有ッ御鬮の面テ。 どちら成ッ共災難を一人ッに負せりや一人ッは助ゥ め白幣。雪の小笹に鑵子の湯立テ謹一で。不浄を清めうやく~しくも。御鬮の面つくぐ~考へ。コレかみ様のしらに言て ハルー はんす 中 ずっとしん しゃち ぬくじ おもて かんが 調 かくじ おもて かんが まもて かんが ままて かんが まもて かんが まもて かんが まもて かんが 茶上ふ。ハアお「志」忝い。扨今日の寒さ次ィ手ながら。竈の祓ちとの間爰に沖津彦おきをさがして馳走ぶり。神は見通し、紫上ふ。ハアお「志」ない。扨今日の寒さ次ィ手ながら、紫上の歌をいっていんでき とお宿が申たい。母者人。必おれが戻る迄どつちへも手放すまいぞ。成『程~~御不肖ながら暫しの内。 ふなさる。イヤめったには帰されぬ。丑の年シの小児二人リ有ル事。御鬮に委細を 考 た。あんまり奇妙な神シ道者。ゆるりふなさる。イヤめったには帰されぬ。丑の年シの小児二人リ有ル専の あきり 十二に成ハ子が二人ワ有ハか。アイ。いやこれ。いかにも一人ワはおれが娘其外には。イヤ有ハイ~。二人ワながら同 、と呵られて。アイはゝ様。裏の寒菊折て来た。コレ花。々とすかしても。イヤ花もいや餅いやじや。嚊様呼>でくれいや ハテかはつた事に し 丑? 此内に

アレあの様にいやるので。わしも逢たふ成ましたと。守する姉も倶時雨。呵ッてもおどしても慕ふ子供は皆尤。といふいあの様にいやるので。わしも逢たふ成ましたと。ゅうとしている。いました。

て逢すに逢されず。どふせん方も。涙ながら。

逢事はならぬかへ。 りやつても。もふ一生逢れぬそや。今迄は隠したが。かゝは此世には居やらぬ死にやつたわいのふ。ヱヽイ。そんならもふ 無おろし。ソレ</</>

女様なうろたへた事が有か。どの様に尋た迚。死"た者にとふ逢れふ。 なふ悲しやか、様何として死しやつたと。立たり居たり。うろ~~と騒げは我レもさはかれてせき上るサド かゝの居やる所は冥途

の道。十万>億土といふて遠い所。我身も倶に死で行ねば。逢事ならぬ片便り。もふふつりと諦で。親といふのはと、様の道。十万>億土といふて遠い所。我身も倶に死で行ねば。逢事ならぬ片便り。もふふつりと諦いる。 一人ワを大事にして。是からそなたがかゝのかはりにおとなしう成ッて。源次郎を 育 にやならぬ合点かいたか。(61ウ)ア

弟は一向訳しらず。 はいふても見る目いぢらしさ。胸一ぱいにせくりくる涙。ほうしに立って行。 イ〜〜。悲しいか道理。賢い者じや思ひ切りや。今から持仏堂の仏ヶ様を。かゝと思ふて拝みやいのと。輪廻を切らす方便なべ〜。悲しいか道理。賢い者じや思ひ切りや。

身に打かくれば弟は。か、様抱ィてとしかみ付々。ノウなんほたきやつても。わしには乳がないによつて。わしや冥途へ

死しやるなら源次郎やわしも一所に。冥途とやらいふ所へ。なぜ連していて下されぬと。かひなき。くどきもぬけの絹え

てか、様を。呼ゝで来てやるはいのと。いへはにつこり嬉し(62オ)げに。そんならちやつとじよ~~はいて。

と竹の子笠。取てあてかふ利発者涙片手に姉弟が、黙く。死出の旅用意。待ちやや。さつきにば、様のいはしやつた。冥途やがらい。

やうなは。わしがよふ覚えて居ると。智恵が敵の物覚へ。なかい未来の三尺帯。障 子細目に差出し。コレ此端を引ばつて。やうなは。 やうじ ほそめ しゃうじ ほそめ は遠い所で死て行ヵねばならぬげな。 わしが一返り死て来て。わがみは跡から迎ひに来る。マア姉を先へ殺してたも。

がたんまつま。ヤレかはいや何事ぞ。おそね~~と呼生ヶる声は門トにも牛頭兵衛が。叩げと明ヶぬ戸打破り。薬よ水よにずた。 5 ぬ舌になむ観>世何のぐはんぜも。へ引ヶ度にあつと(62ウ)くるしみさけぶ声。耳にこたへて驚く老母。 見ればおそね

やないわいの。母を恋しいく〜が積つてこんなむざんな事。コリヤヤイおそね。 <〜<〜と呼▽声も。枯野のいとじ 漸 と。タティレ

や縫事を。 教 てくれる人がない。夕部ぬふた豆巾 着 と此清書をかゝ様に。ちやつと見せたい早ふ死たい。隣路のはままままで、まりて、まりまして、まままでは、まままで、まりて、まままで、まりて、まままで、 前 がむが 術 なさに。冥途へ逢に行まする。冥途へ行のはいかふせつない苦しい物じや。もふ源 くるしき息も。たへぐ〜ながら。ノウと、様。堪忍して下さんせ。か、様が死しやつたと聞てあんまり悲しさ。 :の傍に置って。必死,して下さるな。ば,様は目がうとし。 わしやと、様に呵られても。 か、様の傍に居ねば。 63 オ 次郎は。 のお梅様に やつばりお 綿つむ事

かはいや不便と声限り弟を膝に武任が。思ひ切っても。はらく~とあられ。たばしる涙なり。 借て置った羽子板を。葬礼の乗り物に入って。跡からおこしてと。是を最期の詞にて。終にはかなく成ければ。老母は正体泣が、 (63 ウ

追剥の所為

〈資料紹介〉

翻刻

翻刻

ぞで敵取ッてやろ。回向めされと云捨行。手負の耳に只差寄コレお松。そなたの内じや。源次郎じやわいのふ。紫紫の 染乳房に抱付ク。ヲ、いぢらしや〳〵。まだ虫の息はする様なれど。迚も命は有ハまい。去ワとは憎い盗(44オ)人め。どこぽッタホー ア嫁かいの。誰レが切た〳〵と騒ぐ中にもさつきの咄。若シや夫トがしわざかと見かはす顔に武任も。轟 く胸のくらがりに

賤しいわたし故。疑はれて去っれた身。女房の金といふてはよもや受ケはなされまい。君傾城に穢さふより。夫の手にか 夫」でわたしも。忠義が立て嬉しうござんす。ヤアそんなら夕部のあの金は。室の津の傾城町へ。身を売った十二両。素性でなった。 まる 持ッてたも。か、様起てと 稚 子の。しんみの一ト声通してや。母は今はの目をひらき。武任殿。よう殺して下さんした。持ってたも。 繋ぎ しまき

ら。去ラいでもよい物を。アレ見や。一昨日から夜を寝ぬ子が。そなたの顔見て落付マたやら。出もせぬ乳をくはへて。す

もふ是切(44ウ)で夜の商売。やめにして下さんせへ。ヲ、そふじや共~~。

そなたを其心と知ッた

忠義とは云ながら。

りたさ。身の代お渡し申たさに。山賊の道筋にとふから待って。居たわいの。

や~~とねるわいの。ハア。是が寝顔の見納めか。姉はどこにぞ。おそねは爰へなぜ来ぬと。とはるゝつらさ埋木が猶更。

仏ッ諸共に。 手を引き合ふて渡つてくれと。あへなき死顔差出せば。ヤアおそねは死にやつたか。ハア。はつと計を暇乞。なむあみだ 顔も上ヶ兼る。胸を定ゞて。ヤイ女房。何にも云ぬ。親子三人忠義は立ッた。未来は半座を分て待ヶ。姉と一所に三途 わつと老母の一、声に。わかちなけ(65オ)れと源次郎も。 足摺したる。血筋の別れ倶に。雪共消ぬべし。

折もこそ有ー先ャ走ワが声高く。此家の内に御詮シ義有ッて。名虎公より御上使の御出成ワぞと呼はれば。武任つつ立扨こサッ゚ は

そく、。最前、様々云抜ヶては帰りしが。。弥是に菅三君かくまひ有事けどつた上使。爰に待・受ヶ母人は敵の様子を窺った。。

ずば討手のやつばら何万シ人でも切ッで切死。油断有ルな母人と。二人の死骸ひんだかへ一ト間に入ば。

母も一ッ世の大事そと裾引き上。覚の差添隠し持き討ッ手今やと待ッ(65ウ)所に。名虎が家臣荒川隼人。軍卒討ッ手の出立またが、 かんんかい はゃと かんよう ならで。堂上様の絹上下で故実を正す供廻り。

れと。白木の台に錦の褂。冠 装 束取揃へ老女が前に餝 すれば。案>に相違の母よりも障 子を 隔 て立聞武任。スハ何事がき だい こうちゃ がまりようきゃく まる 老母が前に両手をつき。白井太郎武任公の母君埋木様にて候な。主人名虎より進ッ上申ュ寸ッ志の一下所。御受納なされ下さ

老母さあらぬ顔色にて。武任が本>名御存ジ有ッて。 此所々の御進〉物は。扨は粉」が武勇に免ゝし。 名虎公の御家来に。

切て出んず一下間には。様子白ゆふ神ご道者子細いかにと窺っ

ひ聞

の計略と鍔元くつろげはやり男の。

茅屋に身を 潜 おはする埋木様は。名虎公の北の御方。其御腹に御出ッ生の武任公は。主人の若殿疑ひなし。 抱 んとの(66オ)御上使かな。イヤ左にあらず。我々が主人^と仰ぐ迎ひの 装 束。トハ何故に。イヤお隠しなされな。此が、 御有リ家を承は

り御迎ひの為参シ上。此装束を改められ。早御帰館と威義を正して相述れば。,

太郎が顛倒夢見しごとく。 常々母の物物。 我父は何人共しれずと計り聞たるが。さも有い物の試と肩口ふつつと喰切血汐。

小柄の切先*そ、ぎかくればおのづから。錆付ヶ血はぬぐふがごとく一トつに落る親子の血筋。

・ つい 血で血を洗ふ同根同性。

〈資料紹介〉

翻刻

扨

(66ウ) つたと胸 塞 無量 の思案にくれ居しが。ずんど立ってヤイ偽 はっち しゅん 中

『振袖天神記

は敵の胤なるかと。

に盤石。呑込心地。母もは

非道の名虎が禄をはむ。儕レ等が心にくらべ。覚へもない表裏を餝。躮武任が心を探る穢はしい送り物。持ツて帰いば。

袴ぬい目を。 有ル菅三殿ばい れと丁ど蹴。白ッ台あたりに散乱たり。ム、すりや名虎公の館へ。御入有ル所存シはないな。よし〳〵此上は敵味方。 取ッて帰らふか。 今一ト思案が敵か主人の二つの境。暫くあれにて御返答待・奉り候と。 礼義と権威

始終とつくと神ン道秘密。聞すましてつつと出。敵名虎に縁を引り武任が此家に。大切ッの菅三君暫時も置ヵれぬ。ぱら (67オ)夫晴彦がお供して立帰ると。行を暫しと留る母。ふり切かり入 障 子の内。羽 響 高く白羽の 尖 矢裾をぬはれてかつ しょうし いっぱいき 渡たらる太

残し入にけ

何ンの生きてゐる気が有ふ。 の有様。 是へ出てとつくりと。 最期は親子一体と。抜取『矢先』、咽に、貫、。こなたの一、間に打向ひ。朝敵名虎が血筋の者。最いこ。 たい 御覧ンなされ紀中将貫之殿と呼かくる。声に開 る障子の内。 以前ンの使者は引きか へて

冠 装 東重藤の。弓矢 携 。武官の 粧 ひ。奥の間には菅ン三君。カヘネゥーレをシャンーレロメーラ として立給ふ。貫之一揖事終り。菅三の御事は忝くも朝家の御胤。 幼気したる御冠。天地祈の 御父帝天下乱るべき前表を悟り。 の注連引きはへ 表テ向キは崩御と偽 (67 ウ) 悠然。

り水の尾の山寺に。御身を隠し奉るは貫之が 計 ひ。我レ叔父甥の 好 によつて名虎に随ふ体に見せ。是善卿の一ヶ命も先キ達

使。 帝深く御感の余り。 其袋束を下々し置っる、内勅 の御

玉 名乗ルべしとの御事也。 名虎か妻の埋木。 我とは縁有ル中ながら。

包 ず聞んと有けれは。ノウ 曲 もない名虎に随ふ心ならば。何故に自害せん。廿余年〉以前〉位 諍 ひの時よりも。っぱ こ 心をためさん為。名虎が家来荒川隼人と仮名して。来りし我を貫之としつて。覚悟の此自害は。善悪わからぬ老女の心。 さす敵の余類に菅三殿を預り置り事。鷲の巣に鶯の雛鳥を与るごとし。今にも敵の招あらば裏返る心ゝ底か。(88才)本りなす敵の余類に菅三殿を預り置り事。常の巣にった。

一下太刀討んと思ひ込其度々の母が苦しさ。そなたの力で討ッ事はならぬといふたは爰の事。とても 枉 た種じや物。町人かり 心、見限つて暇取りしは。 奉公に出すより。今の今迄其胤とは云聞さねは夢にもしらず。時去りて又もや名虎。一天に威を振ふ親共しらず朝敵を。 此武任が二つの年。親こそは悪人なれ。せめて此子は吉ッすいの。侍々に仕立ァんと。 誠有是善卿

津浪。突込刃を武任がきり、~~と引き廻し。血ばしる眼くはつと見開き。女房を殺し。子を殺す。不便をこたへ忠勤を津浪。突込む。 家の大恩を一ッ身に受ケたる武任。忠心は変ぜぬ〳〵。朝敵は現在の親。刃向ひならず。 立ァぬかんと思ひしも。 百姓で置った(86ウ)らかうは成ッまいに。よしない武士に仕立ッたが今はそなたの仇敵赦してたもと合す手に落る涙の。滝 水の泡と成たるはよつく。武運に尽果しな。親はとも有いかくも有い。粉いの時より今い日迄。 此世の武士道皆捨々る。 菅^ゥ 原

の詞。歯切り(69オ)歯たゝき無念>の 谺 天に 響 て物すごし。

て忠義は立ヶられず。譬此儘死する共魂は天に帰り。一ヶ念ンの鳴雷と成って。

菅丞相の御身の行末守るべしと。思ひ

が最期にて我災 に源次郎道真が家来となし。二代の武任武部源蔵と召シ仕はん。我ヵ年シも丑おそねとやらんも丑の年シ。 は遁ししが。定業ならぬ其証拠は。一度枯し松の枝。最前、伯母君。 地中に植置き給ひしに。 思はず彼り

(資料紹介) 翻刻

じるき。二度の夢見しごとくにて。と、様ば、様何としてひよんな怪家して下さつたと。すがる兄弟引寄せて。恥しや最いるき。 ふん~~と軒端の御方。春彦にかき抱かれし(8ウ)姉おそね。息吹返す反魂香の。威徳は爰に曽根の松。蘇生の松といち^^* 葉と成ったるこそ蘇生の印シ。守にかけし十一面観音の。功力に命恙なし。ヤア~~春彦。娘を是へと仰の下名マ香の香葉と成ったるこそ蘇生の印シ。 サーンル ぱんぱんぱん くりゅ こうが

子を取くらふ。 前
い
も
。 君に捧げ 此ばゞが心一つで。孫を殺し嫁を殺し子を殺す。此世から鬼神ゝと成って。うかむ世さらに。 昔の鬼子母神ンは。人の戦ルきしぼ 有まじき我子 の臓腑を

鳴弦三度物おとも頓て。 静る太平楽。先ッ夫レ迄は。此地にも長居は悪シかり難波の地。タメメサメン 雷電雨 霰。あら嬉しや。今こそ願ゝ望成就と。いふ声一ヶ度に引き取ぇ息げに雷神の。さいごの様。貫之進で武官の役のはでん。 あられ り 掴で引き出し。柘榴を取て。口に含ではらくくと噛砕。はつと吐たる火(70オ)炎と倶に。松の梢も 霹っっかん かんりょう きょう しょくしょ かんきんき よいしょく しょくしょ かんきん はたがみ 幸ィ直ク様春彦が。忍ぶ庵いはり しんどう。

元来我は神ン職の何国の浦へも渡会太夫。白井太郎が忠義を受ケ。名も白太夫と略姿の百性業引ャ出す。サルルムテッンウ ロムメイ いづく # ホムルムトッジル ドルムムドルムドルムドルムドルムドル 牛の。 綱手縄。

せん。

やがて。青葉のみどり子や。 丑の年。うしや軒端の母君は。せめて三人」のなきからに。草葉の雪の手向ヶ水。此家の名残り。 姉が蘇生は里の名に残る。一木の曽根の松神の。印シと成りにけり(70ウ) 世の名残り

虐政は虎よりはげし囚れに醋を注ぐ。来後臣か故事も今此時に当れるかな。 ぱみゃり しょう すっぱい ウンタんしん なぎじょ ウルカー 悪逆 日々に盛なる紀の名虎が新御殿数多の

局召シ寄せて酒宴に時きをうつしける

町々排

ア〜~者共。覗き 绣 持参>の下郎。是へ〜~と呼ヒ出せば。侍ィ共が案>内に。御前>へ通る覗きのからくり。竹田〜~。 其中ヵに入いて有いまい物でもなし。詮シ義の為二つには。 御 慰 にも(71オ)ならんやと。只今呼出し候と云ィつ、立ってヤ

は早正月の義式の祝ひ。 か。 りは千畳敷の夜゚の体。奥の広さが八万地獄。待テー々広いかせまいか暗くてかいもく何ンにも見へぬ。コリヤ覗く穴が違つた 千>畳敷の大がらくりと。お定りの口上に平太は覗き見人の役。仁>体らしく腰かゞめ片目配つて。守り居る。先>最初の始 イヱ~~違ひは致さねど。何ゝにも見へぬ其体が夜ェの景色て候也。次キは八百やのお七でござる。八百やお七の親達チ お七さんはや正月のくるのには。 何をかつかりさしやんする。今時分、は吉さんが坊さんに成

ば。そんなら殿さん有リやうに申シましよ。 脱で火を包み。我レより先キに煙立ッ。次キの代くはん仰には。お七とはわが事か。アイ私が事でござんする。顔をあげテ て計ゐさしやんす。アレ向ふのお寝間所へ忍ばんせ。わしやお使ィにと走り行。お七は火燵に転寝の。むつくと起て下着をて計ゐさしやんす。アレ向ふのお寝間所へ忍ばんせ。わしやお使ィにと走り行。お七は火燵に転寝の。むつくと起て下着を (71ウ)てゐやんしよと。吉三郎は簑と笠持ッて来りしを。杉は見るよりなふ吉三さん。お七さんはお前のこといふて。 もう此度堪忍して。吉さんと女夫にして下さんせと。(72オ)あどないことを去り迚は。 われが顔を見るに付ても。中々火を付ヶそふな体でもない。付ヶずは付ヶぬと有り様に申シ上ヶいと有りけ あんまり吉さんに逢ったふて。ふうをちよつと付ったれば。ちつと計こげたそふ

袖で涙をしぼりけ

にごさんする。

には吉三郎が鐘をつく。鐘をつけは経文ゝが初vる。経文ゝの功力にてお七は観音と顕はれます。是で先ゝのが入り替り。 お七夫」は叶はぬはいやい。仕おきにせよと馬に乗最期所に着にけり。向ふは狗鴉山わん~~寺お七が檀那寺。

お傍去ずの百済の河成つゝと出。 御遊興の其間タわざとひかへおりました。彼ノ乱性 の金岡次キの間迄引寄せあり。 御対面

を以て。其気違直してくれんと。 付ヶ聖人の像を(72ウ) 画せんと。数多絵師を求れ共の 高慢我慢の御諚意も。一ゝ声千ゝ里になり渡り。名虎が威勢類なし。爰に。がらまんが まゃうね ハル ちゅうき 金岡に勝る絵書*今マ日本ンになし。是へ呼と出せ我レ天下の威勢なをが 。 巨勢の金岡

有へきやと伺へば。

ヲ、一ッ天四海を手に握る此名虎。聖人の徳を備へし事を。

普く人にしらせん為。

賢がんじゃう

0)

障子と名

らや。 ず といふ画工有り。性《得直なる者なれ共恋路に心責られて。狂ひ乱れし青柳の。糸も難面松にふる。時雨涙の。のんさてつやはいう。 ゆうれてき 情に隔はなき物を。靡けくくとふる枝の葉もちりぐくに。なつかしや。恋しくくと浮れしは。顔形がはくだった。 には似も付力

有レ共。いかな似も付ゥず。見そめた人は。柳の腰付キ。顔は姫瓜こなたの顔は渋柿じゆくし。べつたりこけてたはいなし。 何の忘れふ。 恋しい と思ふきみの顔。寝ても(73オ)覚てもさめても寝ても。 ヤ爰にも内裏女郎がたんと

に書ヵせて見よ。用意致せの詞の下。 はつと答へて局達紫石の硯に墨摺た、へ。 犀毛の筆紙取り添っ 銘々奥より持って

出。 サア御所望なさる、ぞ。 認められよとさし寄える。元シ来好る道なれば。にこく~点頭居なをりて。 筆追ッ取レば忽だちまち

〈資料紹介〉翻刻『振袖天神記』

に。形容眼中廉 直 に。含みし墨の一下。落て広がる芦原に。群ゐる鷺を軽書さに。(73ウ)さらく~く~と紙取りかへ。 けいようがんちられんちょく かく 色々四季の花尽し百の鳥類生ヶるがごとく。翅 働き囀るかと怪しむ計り。心狂へど狂はぬ妙手。遖 寄代の名7画やと上ゥ ゥ くる ゆり てうるじ かんしゅ かいばれき たい かんしゅ かんしゅ かんばれき たい

下一ヶ度に。感歎せり。此上何か仕損ぜん弥く~彼いに申付ん。ソレく~受領衣服をあたへよ。畏っつて暫時の内。内蔵寮中のかんだののである。そのでは、これのである。そのない。

なたへ走り。こなたへ行。ころつと横に高鼾どつと興ずる折りからに。

夫婦のやつ原引+出し。責さいなんで手早き詮義。ヲ、夫レよからふ早く呼。鳴川は是善を是へ連レ来れ。はつと領して奥口夫婦のやつ原引+出し。サット゚ードダードダードードダードードードード 知ラせ待ッ間も。

られてからが仏もないどふみやく公家。此河成が連レ行ケば叶はぬ願ひと聞ク悲しさ。何難タ 庭に埋もれ見へければ。ヤアそりや成り申さぬ。此度西国の固めたる。摂州長柄の新関へ改めて押シ廻れば。此後ヶ願とに出ば、うずのでは、からながら、まずのようながら、またのでは、 ず。今〉もしも又替らぬお願ヵひ。何率夫マをおゆるし有。 御帰し給はらは御嬉しからんとひたすらに。手をさげ詞さげ髪も。 (74ウ)波津へ送らんとやコハ何

とせん浅間しやいかなる過去の報ひにて。かゝる思ひをなすやらんとくどき打伏シ泣給ふ。

実や汨羅に沈みたる。屈原が身を今爰に。我レのみ覚て是善卿。末つ方に籠られて。からきうきめにやつれ果無常を。くササヒットッペルート゚゚ー゚゚ー゚゚ー゚゚ー゚゚ー゚゚ー゚゚ー゚゚ー゚゚ー゚゚ー゚゚ー゚゚ー

はんじ出給ふ。

のふいとをしの御姿無や苦しう思すらん。世のなり行と云~ながら。罪なき御身に災難を。受ヶさせ給ふ悲しさに朝な夕なとと、

ヤア我ヵ前共憚からず尾籠也と引わけさせ。所詮当代に帰服せぬ頬、魂。命を絶すは安けれ共。万シ事の法礼宝ラの有所。記書 のうへは (75 オ) 軟楽有レば哀情有り。善う悪々は鏡にて光り曇りは有ルならひ。ちつ共悲しむ事なしと悟切たる御顔ばせ。

で有口。 内せねば違 勅の科。何 国迄も遁(75ウ)れぬ~~。誠夫トが 助 たくば姫が有ワ家を白 状 せい。落しやつたも儕レ等が工みだ。 ぬきばく あくび され共一ッ旦聞か、つた恋路なれば言ハぬ迚其儘に置べきか。筋金挫いで言せにや置ヵぬ。ヤイ久方儕ルに詮シ義は桂姫。入 何ッとくと難題に。追 の智者も恩愛の。姫の詮シ義に眼もくらみ。いかゞ有んと胸ネの中サ。チン万ン無量 思ひ子゛ サレタヤ タ、セタピ ゥ

ごとく也。ヤアしら~〜敷ィ偽り女郎。鳴ハ川そやつ手ひどく責い。ソレ女ー原金岡を引キ起し賢 聖の下ゥ絵をさせいとく

責鳴川早く書ヵせよ河成と。上ェと下々とに眼を配り真中に巌石形。数多の病立ヶ寄てゆすり起せば。現 にも。実 狂人シの

逢[†] た

や見たや恋しやと狂ひ。廻つてどふど座し正体。なくぞ見へにける。

姿。是を配賦に吟ゝ味致さば。何国におつても遁れぬ~~。コレ娘の姿見られよと。差付ヶられて夫婦の人々。はつと計りにいる。

立ー越ー詮ー義をとげ。其絵姿に引合せ首取ッて来るべし。太刀取は鳴川平太。検使の役は其気違ひ。きやつめに首を改めさ いさんでヲ、出来た〳〵。狂人なれ共姫が頼見しりおるは幸ィ〳〵。難波の地には菅原の所願も有レば疑はしし。 目を見合わせ。かほどに身を捨包め共。遁ゥれぬ姫が天災かと。心も落てうつとりとさし、真いておはします。(76ウ)大臣

竹ふり立っる。月清けれど雲霧に隔られたる久方御前。我をも倶にとかけ寄ぃを。官ぃ人とゞめ動さず。あこがれ。中、中、からまいくももり、どだて、ハル・カーののでは、からまり、からまり、からまり、かられている せよ。其時是善が帰洛を赦さん。先ッ夫レ迄は河成ぬかるな引ッ立て。早行両人ゝいそおれと。声も烈しき権勢の。下知に破む。其時是善が帰洛を赦さん。先ッ夫レ迄は河成ぬかるな引ッ立て。卑行両人ゝいそおれと。声も烈しき権勢の。下知に破れ

使の金岡。しさいらしげに気違ヒの守ワに鳴川河成に。追ツ立られて是善卿。同じ難波へ行ク足の。片葉計ワに見残して。別し、中、含タ

れ。行こそ。便シなけれ(77才)

昔の京は。難波の京。今は長柄の里つゞき繁 昌 の地の往 還 に。鏡 の中に女の姿絵おやま紅粉やの看板を。目当テに買ィに増えた なんぱ まり ながら 紅粉鯉の。鱗に黄金を咲せけり。 くる人は棹に干てふ紅粉木綿。牡丹絞りも富貴なる。根分ヶに夏を、隣、同士色を諍ふ植木屋の。鉢植石臺生ヶ船に金魚銀魚ややは、はまり、は、もめん、ばれたんは、これでは、からまり、これでは、これではいる。これで

馴レて 働 舎人之助。畠 の草を取らに手桶 提 振如露も。水際の立ッ男ぶり。イヤ是木助。アノ 橙 はなぜ二つ三つ残ッて 動きない 最早お中ヵにいと島の似合ふ姿もならをより

(資料紹介) 翻刻 [振袖天神記

るにそば立ず。立ッに片足立ッせぬといふ。ほうきを放さず。眼に怪しい物を見ず。 畠 でもそろ ()あるひて。身を遣ゥふ 前にもソレ去年>六月に下した胤が。此月で丁ど十月の産月キ。草木でも人でも。子を産ムに替りはない。 懐 胎 ヱ、植木やの女房でもいかゐ素人。あの種を取って畠へ蒔ば。来ィ年ンは石キ(77ウ)台へ植る様になりまする。 の間は いね お

の第一。サイノ。今朝から気色が悪ルさに。世を忍ぶをつい忘れて。いつ見てもうき~~と。面白さふな舎人様。

が養生の

ても。植木や男の分シ際で。それがまあどふならふ。ア、これひよんな声が高い。 植木屋とお師宿して。二人ワ゚を養 ふ白太夫其手前も有パに栄曜らしひマア返事所か。シヒム 隣な の紅粉屋の娘御がな。 アノお前の事をと。云もあからむ夏紅葉。ア、イヤそれはこなたがしのぶを植ェる栄螺の廻り気。 ム、ひよんな事ならひよんの木を。どり 紅粉やの娘に箔 78 オ が置って有っ

おみき様。 へ物。 在所衆は。寒のべにはけ口多きおやまべに。商7仕廻ふてべにやの娘表をいるといった。 詞をしほに寄り添って。私しやお前に。 アノちつと頼たい事が有ルと。差し

や植かゑふと鍬提。裏の畠へ走り行。

に出。

けふはマア珍らしい見せの番と。

東いてはぢの木の照葉むしれば。ヲ、小桜様。 シゥ。ヒ お髪の事かいな。 わたしは此月*産*月なれは手が上ヶられぬ。此横町に傾城の果が出ッ世する客ふりすて、。 其様にマア照葉むしつてマ木助が見たら呵ろぞへ。 御頼なされたいとは 78 ウ

おやまべにやの娘御は。 お前に頼いたいと

云っはな。 アノ内方の。フウそんならアノ木助の事かへ。アイどふぞあの人ト取ワもつてと。跡は詞も梛の葉に。

に違ひはない。ほんにほんぼにせど門で。男(79ウ)も遣カはる事じやないア、是申。其様に産゙゙月に。お腹立トられては返す 有゚゚故。首尾を見合わせどふなりとゝ申シた分シ。イヤ〳〵〳〵。菖蒲杜若とにつこらしういやれ共。念シヒせふといやつた され様。此中小桜様の云しやるには。べにやの商売には、紫、朱を奪ふと云て忌事なれど。菖蒲か杜 若の花一ト本トくれいと そく〜しい。覚へのない顔付キと。目には涙を持チながら。悋気 妬 は下々より腹立チ見へし。茨 の花。ヱ、悪ハいお聞キな がそなたを取もつてくれとの頼み。此三木が取っ持いでも。首尾を見合せどうなりとゝいやつたげなの。夫レをさつきによ りとゝいふたかへ。コレ木助。〳〵と。呼ばあたふた舎人之助。お三木様何>の御用。いや別ッの事じやないわいの。ホジ き~~の返ン事は木助がとふ仕やつたへ。サアあの人の云^しやる(79オ)にはな。首尾さへ有ラはどふなりと。ヲウどうな る恥しざかり。ヲ、けふと。マア何事じやと思ふたれば。此三木に仲人せいかへ。いかにべにやのお娘御じや迚あんまり早 色事。そりやマア云って上ふけれど。母御様がお聞きならば念〉仏にする隣同士。私が顔が合されぬ。そして此中じ

べにやの母は何事ととつかは表ヶに走り出。小桜何とぞしやつたかと。いへと娘は我ヵ身からおこりし事と得も云ず。諾なサメット゚ 御も娘御。 そゝのかして、徒。。今でこそ商人なれ。夫は伊勢では名有エ人。こんな事聞サれたら木助は隙が出やうもしれませぬ。 ければ。フウ扨は男衆お『なさるゝのか。いやもふ人をつかへば苦をつかふ。殊にお前は只ならぬ身で其様に腹を立タる 短期なや、が産れるぞへ。マア〜〜〜御堪忍。サア聞ィて下さりませ。私が所の木助が。有ふ事かどこやらの娘御を。 (80 オ (大 年シはもいかいで嗜んだらよいわいなナアお雪様お聞サなされて。下さりませ垣小柴垣一ト重隔て。あて年シはもいかいで嗜ない。

こすられ娘もうぢ~~。もじ~~と申シかゝ様わたしは覚へなけれ共背尺延ヒると袖つま引ゥれ浮サ名が立ッ。是といふも独」 いまり はまたけ しょう

身故と母に寄り添蔦かづら。壁訴訟とぞ。見へにける。

母はそしらぬ顔付きして。いやもふ若い者は有ならひ。恥を云ねば利か聞っへぬと。私も十八九の若盛。比子の爺御にふと炒いた。 馴染小桜を設け。子忌も明ヵぬ其中ヶ主は遠い旅他国。 比子も私も其時に生き別れ今において便りもなし。水くさい事ながら。

合せ物は放れ物と十六年別ゥれていれは。夫トの顔はどふやらと行キ違ふてもしらぬがち。何が何やらしれぬが浮キ お三木様も腹立デずと一寸ッ先キは闇の夜に。提燈ともしてあるこそへ。蹴、躓、てもお腹の住居がかはるげな。

増ウッキラぃ ほんに私 (80 ウ

跡に。うつとり桂姫。口で言れずくよく〜と悋気妬の。胸*の闇。ドリヤ見世の番かはらふと。何心なく来かゝる木助。ヤッパ・ とした事が。挨拶に来て懺悔咄し。サ娘戻りや。お三木様。後にお出をしほにして。打連レ内へ帰りけり。

アお三木様。御気色が悪いかして。どふやら済ぬ御顔持。ソレ御らうじませの。何ゝでもない事腹立て。持病の積がおこつ

たかとせな撫さする。折りも有。

ヤアこなた衆も神楽荷を。穢 ふ隙(81オ)のない奥の間へ直して置っていんで貰を。ソレ木助伝へ~~。ヤア女房共。又 太鼓土拍子横笛にて町々廻る太々神楽。先に立って白太夫雇人に。神楽荷持せ。サア戻つたくくと内入のよきにこく、顔のやまだ。

を涌せよ。扨渡会の白太夫といふお師の奨束から脱て。是から植木屋の権九郎といふ商人。一身二名で身はひとつ名は二つ。 持病か何としたぞい。只の身でもないに。此風吹に不養生。春寒いと秋肚饑はこらへられぬ。ヤアおれも肚饑ソレ女子共茶

と声を顰め。 扨桂様。 舎人様もサ、、、爰へく、。 かう申たらお気の障にならふけれど申さにやならぬ。此長柄に関所を

彼私か親類河内の佐太からお供して帰りましたが。ア、流石文 章 のお家にお生れなされて自然の物しり。 りまする。ヤアおやつ次手に気違ひか何やら尋に来るといふて町々の噂。そこでわたしも弟君。 の様な事おつしやるのか。 網代の魚。ヤア其魚で思ひ出したはい。へに鯉はきじる すへ桂様の有家をさがし。 お主様を女房(82オ)にしたり舎人様を家来にしてつかふのは本^に冥加恐ろしい。かふ致すもお主の大切^さ。 自っか積の種そりや何の事じや。サ其べに鯉が。 わたしが先祖も代々のおやつ筋伊勢内宮のお師。 お前を尋出す迄御父是善卿様を関所に人質。 (81ウ)あがりはせぬかの。 ハ、ア聞っへたコリヤ鱗じやな。 此難波の浦々へ。名虎が方より配賦が廻り。 猿田彦の神孫此白太夫も時々はおやつがつてお 木助ソレ水をかへておけ。サイノ。 但は産月てお気が上り。 菅三様を神楽荷に入まして。 いや又此白太夫 其べに おや

切戸開てべにやの座敷産所に伴ひへ入にけり。恋路に迷ふ金岡が~~命や限りなるらん。我一年去御所へ絵を書に参りしに。 様何おつしやる。 体。ヤアこりや奥へはやられまい。 太郎武任が雷と成って守護するも皆お主への忠義。ヤア長ヵ咄して丞相様のお待兼ねと。いふ中ヵに早桂姫産の気付て苦痛 此期に及んて遠慮はいらぬと。手を引き裏の。 幸ィべにやの奥座敷。 日比の懇意は爰の事。 栢の木ヶ伝ひ。此栢にあやかつて。 ア、いやく 隣ない 男の子お産遊ばせと。 は娘の事ハテサテ舎人

(8ウ)さもやごとなき 上臈を見初。其 俤 を絵に写し。肌身放さぬ恋ヒ人の。其顔ばせを三津の浦。其名は月の桂姫。stabble son like stable son like stab

図に合して尋出し。姿を爰に空蝉の。 ア、朽木の桜さへ。 八重九重に咲っ物を。 もぬけの狂ひ人左右には割竹持ッて下ヶ司。鳴ル川平太が引ッ添て倶に乱る、不狂人。増え、くる。中 中に流る、桜川。 花も紅葉もちりしほが有ルとの。迚もちるなら。 風に任せてち

n かしなそれは子故に迷ふ親。 恋しき人か花ならば。 此流にてかづき上。月を救は、おのづから。 月の桂や救はん。

(資料紹介)

翻刻

娘のかよはき両手を取っ。引立ればのふ悲しや。是かゝ様と泣ヶ声に驚き母もかけ出て。コレく~く~。こちの娘を何とす。 ら桜の~~科はちるぞ恨泣。べにやの表テに立チ寄りて持ッたる姿絵引キ合せ。ア、嬉しや今こそ願ひ金岡が。 鏡の中ヵに有り明のがゞみ (83オ) 月の 桂と小桜に。しなだれ寄って抱き付。余念たわいも鳴り川平太。家来引具しかけ入て 其恋人は是爰

なる。下*:万>民の見せしめに此姫は刑罰と。引立る娘に縋り。桂 姫とはまんさらの人ト違ひ。キボ ホッシット ホデ ド トッシット る のじや。イヤ面倒な。 サア絵が有ふがとふせふが此子には爺も有り。 名虎公よりお尋の桂姫。不義。徒 で入内を嫌ひ 勅を背ゃし女なれば。 母が産ッだに違ひはなし。 外ヵを御吟ン味遊ばして。 親是善も長柄の関所に イヤ違はぬ其證 拠こ 娘が命ずお 姫か俤

助ヶと。手を合せかきくどく。物の哀も物狂ひすつくと(33ウ)立てけらく〜笑ひ。生ヶて置ヶば入内さす桂姫。どうでも増えた。 増入 かんしょう かんぱん かんしゅう しゅぎい

姫 に残しけり。ハレすでつほうな気違ひめ。すつぱりとこりや出かした。名虎公の御成道始め違背の者にはよい見せしめ。 太が指シ添すらりと抜サさかりをまたぬ小桜が。首をあへなく切ワ落すわつと泣ク母血汐にて。朱に染たるお山べに姿を鏡タなが指シ添すらりと抜サさかりをまたぬ小桜が。 首をあへなく切ワ落すわつと泣ク母血汐にて。 常りま が最期の上は。 長柄の関所に擒と成りたる父の是善。 明早朝に御赦免有ん。 御褒美は追って御沙汰と。首取り持せ立チ出

ませふ。みすく~の門~違ひと思へど云れぬ背中に腹。 始終のわけを白太夫暖簾の影より走り出。母様のお歎き御尤。御取り込の其中でひよつと産れたら気の毒。ぱい お三木様の気が付ったと奥の間でひしめく声。立っにも立れず白太夫 マア連レて帰

れば。なふ今暫し災難で死たる娘。最一ヶ度顔をと取り付を踏(84才)

退蹴退鳴ル川は家来引き具し立き帰るのけばのけった。

居ル所さへ泣き入母。立ま上つてつかくくと胸ぐらをしつかと取り。 コレ金岡殿。百済の河成が娘深雪。 十六年以前あふぎの

ずと云物を。水ももらさぬ親と子のいかに狂気したる迚。胤腹わけた娘(8ウ)の小桜よふも~~切っしやつたのふ。そい。 紫 かん かん やい かん かん かん かん かんしゅ しょうき されたと。首なき死骸に抱き付。前>後もわかず泣けるは理りせめて哀なり。 らふといふたりや。嬉しそふににこく~と笑ふた顔。目先キに。ちらく~見る様な。今の先キ迄べにはいて猪口持チながら殺 返しや。~~。~。返らぬ事とは思へ共。夕部迄も今朝迄も。 別れをした女房見知ッてか。イヤおれは何ッにもしらぬ乱心。イヤ気違ひごかし置ィて貰ふ。コレ 譬 にも気違ひは水こぼさ してマア唐から戻つて妻子の所へは寄っ付ず。他人に勝つたけんどん邪見。娘は母に付タ物を。なぜ気儘に殺しやつた。娘 か、様わしにと、様はなぜないや。 ヲ、追ッ付ヶ逢してや

狂気の金岡娘の最期母の歎きに目もやらず。伊勢内ィ宮の社人>猿田彦の神孫。玉串大内人の二男渡会の春彦。 息災に有ッ

に縁を引っ女房。当歳で別れた娘見知らふ様はなけれ其。此鏡の絵に 筐の相‐紋ゝ。扨は此家に有ヮけるよと知ッたる金岡 との手詰の難題。 空恐ろしく勿体など。筆を持ッ手もわなゝく計。帝 調伏の天罸にて。狂 気せしと名虎をあざむき。河成營の神で、 ゆうたい 調伏せよ

でなふて切れふか。我しも菅家に所縁有しば。弟に忠義を立すさせふ為計。親の悪事を見限つて音信不通の女房娘。不便っや 此絵に合せて桂姫の姿絵を。娘が姿に書*なしたは敵*の眼^前^。絵筆に刃金はなけれ共子を殺す気の 乱 焼。狂気 (85 ウ

資料紹介〉

翻刻

ウ・ご

桜に逢さふ為に書ったのが。返つて娘の命を取り看板て有たかと。しやくり上~~歎けば(86オ)夫りも諸共に。 斎宮の別れの櫛。姿絵につまぐしをさゝせ置キなば此家に。娘がゐると思し召し尋て見ゑふと思ふた故。爺御をこがれる小ッ゚゚゚゚゚゚゚゚゚゚゚

雨に花の。ふりしくごとく巾

んとお雪に死骸片々付ヶさせ。はらひ給へ清めて給ふ太祝詞。産家の 障 子引き立て。入『間程なく菅丞 相。十三才の児わげへんというだい。 ままい まきんりと うちゃ しゃうじゅ

涙悦びの。初ッ声高く奥の間に。桂姫様たつた今御平産と。知ッせの声と諸共にいそ〳〵出る白太夫。 よな。娘を捨て桂姫の一ヶ命を救ふといひ。又是善卿の 囚 れを 遁 給ふもおことが情ヶ。子を殺す親心。我ヵ父母の御めぐみ 申く、桂様の御平産と

になき人。暫くも其方が妻と呼ハれし其人トの。腹に懐りし三つ子なれば白太夫が子となして。我カ愛マ木クの松梅桜。三シ 御対面をと伺へは。三人リながら堅固とは珍ら敷誕生。天下の吉事去リながら。桂姫は今シ日只今。 は。一ト人リならず二人ならず三人の御男ン子。三つ子は天ン子の守とやら目出たい御産の産子にめんじ。 名虎が為に命を失ひ此世 姉君は久しぶりの

云ィながら。唐土の聖人>の教へ。三十にして 娶 時は必父母に申と云っ父の卿の赦しもなきに夫トを定メ゚。歯を染し密通の誤

天」故に是善卿の身を苦しむる不孝の姉君。兄弟の名乗りをせぬは父への憚り。此後迚すも桂姫不義に染たる鉄漿を兀し。

ŋ

元上の白歯と成り給は、其時対面致すべしと一ッ句の道理に舎人之助。恐れ入りたる天シ神シの卅五日に鉄漿付ケぬ。世のいまw

しめは是とかや

舎人之助立寄って召せ。替ェたる唐嚢束。冠に有ヮぬ輪巾。深衣の裔踏したき。携へ給ふ好文シ木ゥ末世に唐渡の天神シと。尊サッジポッ゚゚ 御秀才。育ましたる我レ等迄。猿田彦の子孫ンにて鼻高〳〵。迚もの事に此袋束を召かへられ。文章の規模となし給へと。 前我」も此事を。見しは正しく正夢ぞや。唐帝の賜おろそかに請がたしと。押シ載き給ふにそ白太夫横手を打。唐迄聞っへた と色香を失ふ。唐 奨 束と諸共に。菅三に値へよとの御事也と首にかけたる唐奨束。好文木の一ト枝を菅丞相に奉れば。夜

み尊む御神ン願今此時としられけり。

くる紅の。べにやの店の物ほしさほ。時に取っての籏竿とさつと押シ立。日ッ月ッの帝の威勢をまつ先に。官軍シをかり催 成ッて御奉納の錦の御籏奪取ルを。某横合より奪かへし候と。差出せば舎人之助。我ル流浪の艱難も此御籏の紛失故。武運開 ヲ、紀の名虎を亡ぼすは我方寸`^の胸に有ワ。只此上に心せくは是善卿の御身の上。姫に替りし小桜が首を関所へ持行

悔給へは白太夫。兄者人は聞ふる名画。禁庭庭にて書ゥれし馬。夜な~~(8ウ)出で萩の戸の萩をくふたる例 ば。父は赦され給ふと聞っ。夜も早七つ明迄は今一時。半時にても父君に。苦しみ請させ奉ハは子の身として半ン時の不孝と。

翻刻

絵書時を作らば鶏鳴也と関所を開。是善卿の御赦免は必 定。函谷関の吉例サア。遊はせと 傍 の染地紅粉筆を。

たふも金岡が。 んと。べに筆追ッ取ッさら〳〵と 画 鶏 忽 に。絵絹を放れ羽たゝきして飛上り。嘉慶幸〳〵と時を作れば辺りの鶏。 指シ寄れは辟するに。及はず金岡も。 調伏の絵は非義なれ共。是は正しく孝の道。実一心を凝しなば。などか時を作らざらずがで 倶にう

に呼はる声は風につれ手に取ス様に。聞コゆるにぞ。イデ御迎ひと菅丞相。金岡兄弟供奉の役。舎人殿は此家に残り。嫐ジ 門っを開いて並ぶ木の影。数多の松明高提燈。 警固の武士前後をかこみ。是 (89 オ (2) 善捕はれ御赦免有リ御帰洛有ぞと声

の介抱頼み頼っるゝ。母が袂トば難波江の涙にひたす。身をつくし哀にいとゞ丞相も。御目うるみて小桜が。菩提の為の糸がほう

仰ぶが づら名にしながらの橋ばしら。朽ぬ孝心いさほしを。書*伝へたるもしほ草。筆の冥加も荒人神。扨こそ天満大自在天神と

給ふぞありがたき (89 ウ

第五

玉を改め行を改む今此時半。紀の大臣が悪逆四海轟かす。車の前>後に付き随ふ橋宗岡百済河成り鳴ル川平太。其外ヵ官巻に 人、仕丁迄権威を鼻にのさばりくる。

アレ引きのけよ者共と無法の下知にばらく~く~。 女 ナと 侮 官 ッ 共ほたへ半 ッ 分傍若無人。 恥しそふに女房達 チ。 テモ ぬをどりり

ら。

た~~刀もぎ取りかたつぱし。大げさ竹割やゑ無尽なぎ立~~。三重へ切り伏れば一ト人りも残らず死てげり。 連レー一切ッてかゝる。ヤア干潟におどる小鰯めら首引き抜ぁんと大手をひろげあたるを幸っこな微塵。蹴上ヶ蹴飛しは、 らり~~と投ヶ(90オ)付々れば宗岡 怒 て。ヤア女とゆるせば狼籍者。打き殺さんと鳴川河成追ッ取り巻。こなたも銘々絹脱らり~~と投ヶ(901年)

踏ゆる折りからに。こなたの車の内よりも飛じくる一下矢。宙に掴んて打捨れば。不思議や一ッ天かき雲。篠つく雨風ど(誰) サーコ かり ドレ き 中ヶより車を蹴やぶり~~顕はれ出る名虎が形相。六天魔王の怒れる(90ウ)両眼ン。くはつとにらむをことともせず。 しなんどもおろかなり。かゝる所へ。菅丞相跡に続 て紀の貫ッ之キ宮シ軍シ 随 へ馳来つ。ヲヽ目出度し〳〵。 我レ組‴とめんと三人ンが。進めど高官ン勢に思はず跡へたぢ〳〵〳〵。すぐに付ケ入飛ヒかゝり苦もなく三人踏倒し。足下に サア是からが鯨の大魚鏞は是ぞと抜き身を車へなげ付く、。イサこい合点ゑいやうん覆がへさんとする所を 草木吹折ル霹靂。どうど落たる猛必の丸かせ。 名虎が五体二つにさつとわけ、雷。鬼神"の怒天の責おそろ 惟高の親王今

世迄威徳を。慕ふ国民も。 は。 ぞ誠トの御得道。手もおろさずに(91オ)朝敵滅し。偏に加茂の御神徳。有『難々し~~と車に向へば。御簾巻上ヶて天皇を誠トの御得道。手もおろさずに(91オ)朝敵滅し。。に加茂の御神徳。曹宗華のしく~と車に向へば。御簾巻上ヶて天皇 龍眼殊にうるはしく。 実楽める御代成ルはと語り伝へて尊めりばになる。 御悦喜並居る人々も。はつと敬ひ奉り再び御位、九重に匂ふ梅が香菅家の栄へ。天満神と今のゆるのはな

近松半二

作者連名

明和六世世年

正月廿七日

松田才二

近松桃南

三好松洛(91ウ)

竹本義太夫博教

先師之源幸甚

師若針弟子如緀目吾儕所伝沂

右之本頌句音節墨譜等令加筆候

予以著述之原本校合一過可為正本者也

大阪土佐堀裏町

加嶋清助版(92オ)